北越雪譜 初編 上之巻

和書門
類 三六五三六
號 一二二
函 一四
架
冊 七

内閣文庫
和書
類 三六五三六七
號 一二二
函 一四
架 五
冊 七

内閣文庫
番號 和 365236
冊數 7 (1)
函號 175 78

175-78

国立公文書館
National Archives of Japan

越後鈴木牧之撰
江戸京水百鶴画

京山人百樹刪定

北越雪譜 初編 三巻

江戸書肆 文溪堂梓行

内閣文庫

北越雪譜敘

世之農商而嗜文雅者、或不知取公文雅為文雅徒企羨韻士墨客之風標泥酣文酒流連玄月而置生計於不問以傾産業者間亦有之是豈嗜文雅罪哉其人特自取之耳矣鈴木牧之翁者北越塩澤之老農也性嗜文雅而能尚節儉抑騎情不強誦淡於経営之中而務鉛槧旅會計之餘以交遠近之墨客嘗以堪忍之二字

銘自守以故其名久布遠邑而生業亦因以致豐饒矣嗚呼若翁者不徇文雅之名而能務其實者非耶余於翁得一面識於江戸而後特以書訂交者有年于此今茲乙未遠寄示雪著北越雪譜者六卷併囑校訂時方盛夏炎威如燬乃就小囱下試繙而閱之則越雪恍如耳目間驟眉之夢目見紛霏之影使人頓忘輒中之苦讀到積疊埋屋行旅不通人以窮乏業米或不給則澶然寒顫肌膚而之栗生矣余因以謂孰袴輕薄子冬當微雪俄下紛々舞空之際彫鞍寶勒飛玉塵於郊坰或氈帽棕鞋蹈瓊瑤於街衢或重舸載妓或高樓呼酒直以奢勝遊樂事曾不知飢寒而何物若令其人淡然書依以想其稚々凍餒之苦狀乎然則安玄不有能有恪非宴安々公共而戚々焉也戒懼之心者哉寧梓而行之至有裨益世教蓋非鮮小也間者

猶得秋涼聊削毛駁雜校訂方畢者三卷書賈
文溪堂見而喜之謀梓行之余寄簡以告翁
曰雪中閉戸漫筆豈敢梓耶於是予不復俟請
之於翁舉以付之翁之嗜文雅而能務甚實此
必笑領之而已翁之稿本國字之間雜字者嘗
不添音訓之假名余今盡添之以便童蒙云爾
天保六年乙未秋閏月
江戸　京山人百樹并書

此書の稿本図ハ別冊ト成ハ其説ニ大図或描ケ添ふるもあり
皆牧之翁ノ自筆の草画也其挙梓行の為ニせず繕ハ図ニ
渋鐵重複あるを今梓ニ臨て至図の過半或省き又或新に
写かれを存して巻中ニ夾刺ふるハ単冊ニ尽し難或ハ也則ハ
是刪定の為ニ係る所也余嘗ハ原図或閲ふるニ雪中の諸状
混錯を走墨ニ点して通暁し難きかれ靴中の詹岸ハ或何如
元性翁ノ草図ニ倣ひて喜ノ描ける図ニ或原図の梓ニ入るもハ則
其或加ふ或説有て図書きの其説ニ據て其図或作りもあり蓋余志
幾地或踏ず越雪の喜事ニ於て茫然たり故ニ雪図ニ於て違漏ある
知べきまで其得を編者ニ勝るを勿れ　乙未秋　京山男少年　京水百鶴

掘除積雪之圖

枕間簌〻
雪華飛天
曙色来白
四囲堺絶
樵林人不見風凄猟径犬
空飢懶乗冷兢促高履屐
掛帆光象敵衣屋裡要知
春色到墻頭之梅早梅雛

右賦小越雪景

江戸 醉石山人禄題

京水筆

屋上雪掘圖

縫を穿て雪行圖

雪中歩行の用具

京水図

北越雪譜初編 全上中下 巻之上目録

地氣雪と成る弁
雪の深浅
雪の用意
雪の堆量
雪を拂ふ
雪道
胎内潛
熊捕 並白熊
雪中の虫
雪中の火
雪頽
雪の形状
雪意
初雪
雪竿
沫雪
雪蟄
雪中の洪水
熊人を助
雪吹
破目山

○通計二十一條

北越雪譜初編巻之上

越後塩澤 鈴木牧之 編撰
江戸 京山人百樹 刪定

○地気雪と成る弁

凡天地形成為て下す物○雨○雪○霰○霙○露ハ地気の粒珠なる所霜ハ地気の凝結する所冷気の強弱ふるて其形を異ふるのみ地気天ふ上騰形を為て雨○雪○霰○霙○露と成て下る温気をうくれバ水となる水ハ地の全體なるゆえの地ふ飯ゆり地中深けれバかゆゑず温気あれと地温の気得て気成吐天ふ向て上騰ずゆ人の気息のごとく昼夜片時ふ絶るのみ一天も又気成吐て地ふ下す是天地の呼吸なり人の呼と吸とのごとく天地呼吸して萬物を生育ス天地の呼吸常成ふ失ふ時ハ暑寒時ふ應せず大風大雨其餘さまざまの天変あるハ天地の病ると天ふ九ツの段あり ことを九天と云ふ九段の内最地ふ近き所を太陰天と云ふ 地球去る高さ四八万二千五百里と云ふ 太陰天と地との間ふ三ツの際

あり天ハ近を熱際とハ中を冷際とハ地ハ近を温際とハ地気ハ冷際を限りとして熱際ハ至つて冷温の二段ハ地を去ること甚だ遠ケれ冨士山ハ温際を越て冷際ハちかきゆゑ絶頂ハ温気通ぜざるゆゑ艸木を生ぜず夏も寒く雷鳴暴雨を温際の下ハ雷と名立ハ雲ハ地中の温気より生ずる物ゆゑハ其起る形ハ湯気のごとし水沸て湯気の起と同じ雲温なる気成て天ハ升りかの冷際ハ温なる気消て雨となる湯気の冷て露となるが如し冷際ハ冷て雨成ること雲散さて雨露の粒珠ハ天地の気中ハ在る成ゆゑハ艸木の實の凝成ハ気中ハ生ずゆゑ雲冷際ハ凝て雨となる時天寒甚しく時ハ雨氷の粒となりて降り下る天寒の強と弱とハよりて粒珠の大小成為す是を霰と雪と也雪ハ夏のその弁地の寒と強き時ハ地気形成ること能ハず天ハ升る微温湯気のごとく天の曇ハ是と地気上騰と多けれバ天灰色をなして雪なんと成ること曇る雲冷際ハ到り先雨となる此時冷際の寒気雨成氷すべき力たること甚だ花粉を為して下ハ是雪と地寒のゆゑとつよきとよりて氷の厚と薄との如し天ハ温冷熱の三際ハ人の肌ハ温ハ肉ハ冷なる臓腑ハ熱なると同じ道理と気中萬物の生育悉く天地の気格ハ随ふゆゑ是余が發明ハ諸書ハ散見したる古人の説と

○雪の形

凡物を視ハ眼力の限りあり其外を視ること能ハず人の肉眼を以雪成ること一片の鵞毛のごとくなれども数十百片の雪花成併合て一片の鵞毛を為こと是を験微鏡ハ照し視ハ天造の細工なる雪の形状奇妙なること下ハ図せるが如し其形の齊々たるハ冷際ハ於て雪となる時冷際の気運ハ凝なる雪の形気ハ應じて同じくなるゆゑ也昨日の雪も今日の雪も一望の白模糊を為のみ下の図ハ天保三年五十五品の内成謄寫ゆゑ雪六出成為以て一成圍と円體ハ九を六成以て一成圍む定理中の定数誣べからず

御説ハ曰「凡物方體ハ四角なる必八を」云こ雪を六

の花とのゝるゆ　御説を以あるべし　愚按ハ円ハ天の正象方ハ地の実位ゝ天地の
気中ハ活動する万物悉く方円の形式失ゝ故その一式以ゝ人の體方ハ〜て方
ゝ〜ず円〜て円〜ず是天地方円の間ハ生育ものゝ天地の象式ゝるゆゑ子
の親ハ似るハ相同じ雪の六出する所以ハ物の負長数ハ陰半数ハ陽ゝ人の体男ハ
陽ゝるものゝ九出〜・頭・両耳・鼻・両手・両足・男根　女ハ十出ゝ男根ゝく・両乳あり　九ハ半の陽十ハ長の陰ゝ
もとゞも陰陽和合〜て人式為ものゝ男ハ無用の両乳ありて女の陰ハかゝゞり女ハ不用の
陰舌ありて男ハかゝゞる気中ハ活動萬物此理ハ漏ゝるゆゑ〜雪ハ活物ハあゝゞるゞもゝ
変ぜる所ハ活動の気あるものゝハ六出〜る形の陰中或陽ハ象る円形を具〜ハる
もあり水ハ極陰の物なれども滴ゝ時ハゝるゝべ円形をなゝ落るゝところハ活く
萠あるものゝハ陰ハ〜て陽の円をゝ〜ゝるゝべるゝ天地気中の機関定理定格あるゆ
奇こ妙こ愚筆ハ尽〜がゝ〜

○雪の深浅

左傳ハ隱公八年平地尺ハ盈を大雪と為と見えゝるハ其国暖地なるゝゝ唐の韓愈が雪
を豊年の嘉瑞とのゝ〜も暖国の論ゝさゞゞ唐土ハも寒国ハ八月雪降るゆ五雜
組ハゝえゝり暖国の雪一尺以下なゝゝゝ山川村里立地ハ銀世界をゆ〜雪の飄ゝ翩ゝ
なるを観て花ハ諭へ玉ハ比べ勝望美景を愛〜酒食音律の楽を添へ画ハ寫〜
詞ハつゝ称て称翫するハ和漢古今の通例なれども是雪の浅き国の楽ゝ我越後
のごゝく年毎ハ幾丈の雪を視て何の樂きゆゝゝん雪の為ハ力を尽〜財を
費〜千辛万苦するゆ下ハ説く所を視てかゆひけるゆ〜

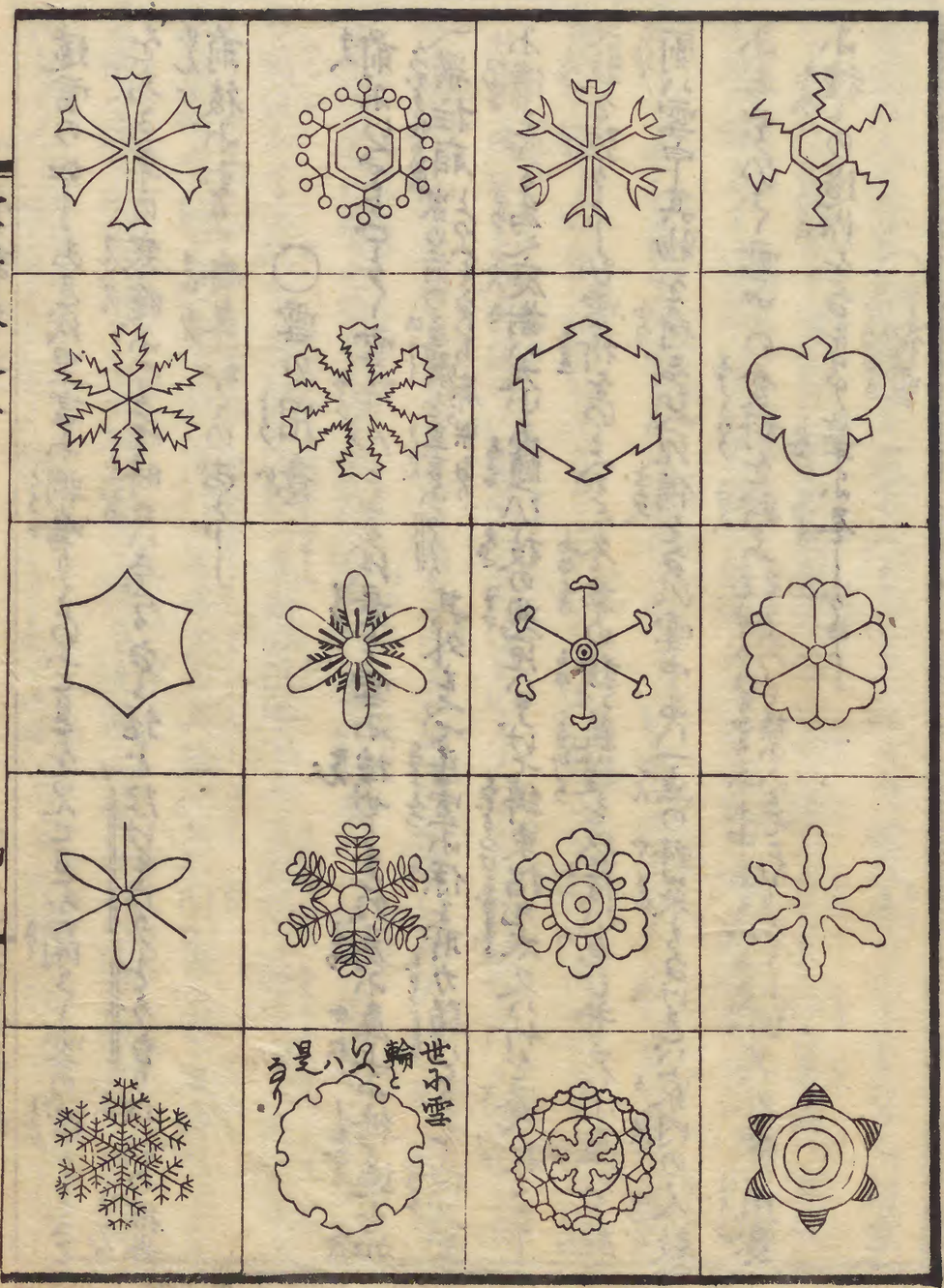
○雪意

我国の雪意ハ暖国ハ均〜かゝゞゝゝよゝ九月の半より霜を置て寒気次第ハ
烈ゝく九月の末ハ至バ殺風肌を侵て冬枯の諸木葉を落〜天色雲ゝ〜て日の光紙
看ざるゆ連日是雪の意ゝ天気朦朧ゝるゆ数日ハ〜て遠近の高山ハ白を点ゞ
て雪を観せ〜むゝゝ千里言ハ嶽廻とのゝ又海ある所ハ海鳴り山ゆゝき処ハ山ゆる

○験微鏡を以て雪状を審に視る図

此図ハ雪花図説の高撰中に在る所五品の内を限る雪も是則江戸の雪と万里をへだてる紅毛の雪もことゝに同じ物なる事高撰中に詳と以て天の无量なるを知べし

天機凡そ百花中六出奇麗別示工
詳雪言篇窮極冊茲抽珍図辱
喜風 題雪花図 牧之 印 印



遠雷の如くあるは紙里言に胴鳴りとのふことを又こゝを聞く雪の遠くゝざるを去る年の寒暖につゝて時日はさだまらざれ共たけ〳〵どうりは秋の彼岸前後にあり毎年かくのごとし

○雪の用意

前にいふごとく雪降んとする紙量り雪に損ぜざるを為に屋上に修造を加へ梁柱廂家の前の屋翼を里言ふらうり廊架をかけ其外もつて居室に係る所力弱ハこゝを補ふ雪に潰されざる為に庭樹ハ大小に随ひ枝の曲ゝるハすげて縛束揖丸太又ハ竹を添へ杖とす〳〵て枝を強くす〳〵む雪折をのがゝ冬草の類ハ菰筵を以覆ひ包む井戸ハ小屋を懸て厠ハ雪中其物を荷ふもの〳〵備をなす雪中ハ一点の野菜もなければ家内の人数に応じて雪中の食料を貯ふ土中にうづり又ハ桶に入れ〳〵む其外雪の用意に種〳〵の造作をなす筆に尽しがたし

○初雪

暖国の人の雪を賞翫するハ前にいふごとく江戸にハ雪の降ざる年もあれば初雪ハことさらに美賞す雪見の船に哥妓を携ハ雪の茶の湯に賓客を招き青樓ハ雪紙居続の媒とす〳〵酒亭ハ雪を来客の嘉瑞とす雪の為に種〳〵の遊楽をなす枚挙ゝ〳〵雪を賞するの甚〳〵紀ハ繁花の去るを惜む所〳〵雪国の人こゝを見てこゝを聞て羨ざるハなし我国の初雪を以て〳〵に叱とを楽と苦と雪泥のちがひこそもく越後国ハ北方の陰地なれ共一国の内陰陽を前後にいんとなるゆゑ天ハ西北に垂れ西北を陰とし地ハ東南に足れ共東南を陽とす越後の地勢ハ西北ハ大海に對して陽気こゝ東南ハ高山連りて陰気こゝに西北の郡村ハ雪浅く東南の諸邑ハ雪深し是陰陽の前後にあるに似たり我住魚沼郡ハ東南の陰地にして巻機山・苗場山・八海山・牛ヶ嶽・金城山・駒ヶ嶽・兎ヶ嶽・浅州山等の高山其餘他国に聞えざる山〳〵波濤のごとく東南に連り大小の河〳〵も縦横をなす〳〵陰気充満して雪深き山間の村落なれば雪の深をなす〳〵冬八日南の方を周ぬる北国ハまもなく寒〳〵家の内にとゞまる北ハ寒く南ハあたゝかなると同じ道理と我国初雪を視るに遅と速とハ

其年の気運寒暖につれて均しからずといへどもおよそ初雪は九月の末十月の首にあり我国の雪は鵞毛をなさず降時はかならず粉砕をなせり風又これを助く故に一昼夜に積所六七尺より一丈にいたる時もあり往古より今年にいたるまで此雪此国に降ざる事なし、されば暖国の人のごとく初雪を観て吟詠遊興のたのしみは夢にもしらず今年も又此雪中に在る事かと雪を悲むは辺郷の寒国に生たる不幸といふべし雪を観て楽む人の繁花の暖地に生たる天幸を羨ざらんや

○雪の堆量

余が隣宿六日町の俳友天吉老人の話に妻有庄にあそびし頃聞しに千隈川の辺の雅人初雪より天保五年十二月廿五日までの間雪の下る毎に用意したる所の雪を尺をもつて量りしに雪の高さ十八丈ありしとぞ此話雪国の人すら信じがたくおもへどもつらく思量に十月の初雪より十二月廿五日までおよその日数八十日の間に五尺づつの雪ならば廿四丈にいたるべし随て下ば随て掃ふ処は積で見る事なし又地にあれば減もするゆゑ

かゝるをもつて是をおもへば我国の深山幽谷雪の深き事はかりしるべからず天保五年は我国近年の大雪なりしゆゑ右の話誣ふべからず

○雪竿

高田御城大手先の広場に木を方に削り尺を記して建てらる是を雪竿といふ長一丈也雪の深浅公税に係るを以てなるべし高田の俳友楓石子よりの書翰に天保五年の仲冬雪竿を見しに雪竿も当地の雪此節一丈に余れりといひ来れり雪竿といへば越後の事として俳句にもつくれども此国に於て高田の外無用の雪竿を建る処昔はしらず今はなし風雅をもつて我国に遊ぶ人雪中を避て三夏の頃此地を踏ゆゑ越路の雪をしらず然るに越路の雪を言の葉に作意をまじふるゆゑ我国の心には笑ふべき事多し

○雪を掃ふ

雪を掃ふは落花をはらふに対して風雅の一ツとして和漢の吟詠あまた見えたれどもかかる大雪をはらふは風雅の状にあらず初雪の積りたるをそのままにおけば再び下る

雪を添へて一丈ゐあるゆもあるをバ一度降バ一度掃ふの雪ぬけまバ是を里言ゐ雪掘とゆふ土を掘ごとくもるゆゑゐ斯いふ掘ざるバ家の用路を塞ぎ人家を埋て人の出べき処もなく力強家も幾万斤の雪の重量ゐ推碎んをおそるゆゑ家として雪を掘ざるハ

ゆゑ掘るゐハ木ゆゑ作りゐる鋤を用ふ里言ゐ雪掘とゆふ則木鋤と掬とゆふ木をもつて作る木質輕強して折るゆゑく且輕し形ハ鋤ゐ似て双廣し雪中第一の用具ゆゑバ山中の人ゐを作りて里ゐ賣家毎ゐ貯ざるハゆゑ雪を掘る状態ハ図ゐわるハ

ゲ如し掘ゐる雪ハ空地の人ゐ妨ゆゑ処〳〵山のごとく積上るゆゑを里言ゐ掘揚とゆふ大家ハ家夫を尽し力たらざるゆゑ掘夫を傭ひ幾十人の力を併て一時ゐ掘尽す事を急ゐ為

ゆゑハ掘る内ゆも大雪下るバ立地ゐ堆く人力ゐおよばざるゆゑ掘る処図中人数を左ハ大家の畧して ゆゑ

ゆゑをゆふ小家の貧しきハ掘夫をやとふべ能ず費わるバ男女をいはず一家雪をゆる吾里ゐ

ゆゑ〳〵ず雪ゆき処ハ皆然ゆり此雪いくばくの力をつかひいくばくの銭を費し終日

ゆりゐる跡〳〵その夜大雪降り夜明て見るバ元のごとし かゝる時ハ主人ハさゝ〳〵下人も頭

を低て歎息をつくのみ大低雪ふるごとゐ掘ゆゑゐ里言ゐ一番掘二番掘とゆふ

○沫雪

春の雪ハ消ゆゑをもつて沫雪とゆふ和漢の春雪消ゆゑを詩哥の作意とも是暖国のゆゑ寒国の雪ハ冬を沫雪ともゆべしいんとうるバ冬の雪ハいやゆゑつゆりて凝凍ゆゑ〳〵脆弱ゆゑ泥のごとし故ゐ冬の雪中ハ撓縫を穿て途を行里言ゐハ雪を漕とゆふ水を渉る状ゐ似ゐるゆゑゆや又深田を行ごとゆり初春ゐいゑを雪悉く凍り〳〵雪途ハ石を布るごとくゆゑバ往来冬よりハ易し暖国の沫雪ハ気運の前後かくのごとし

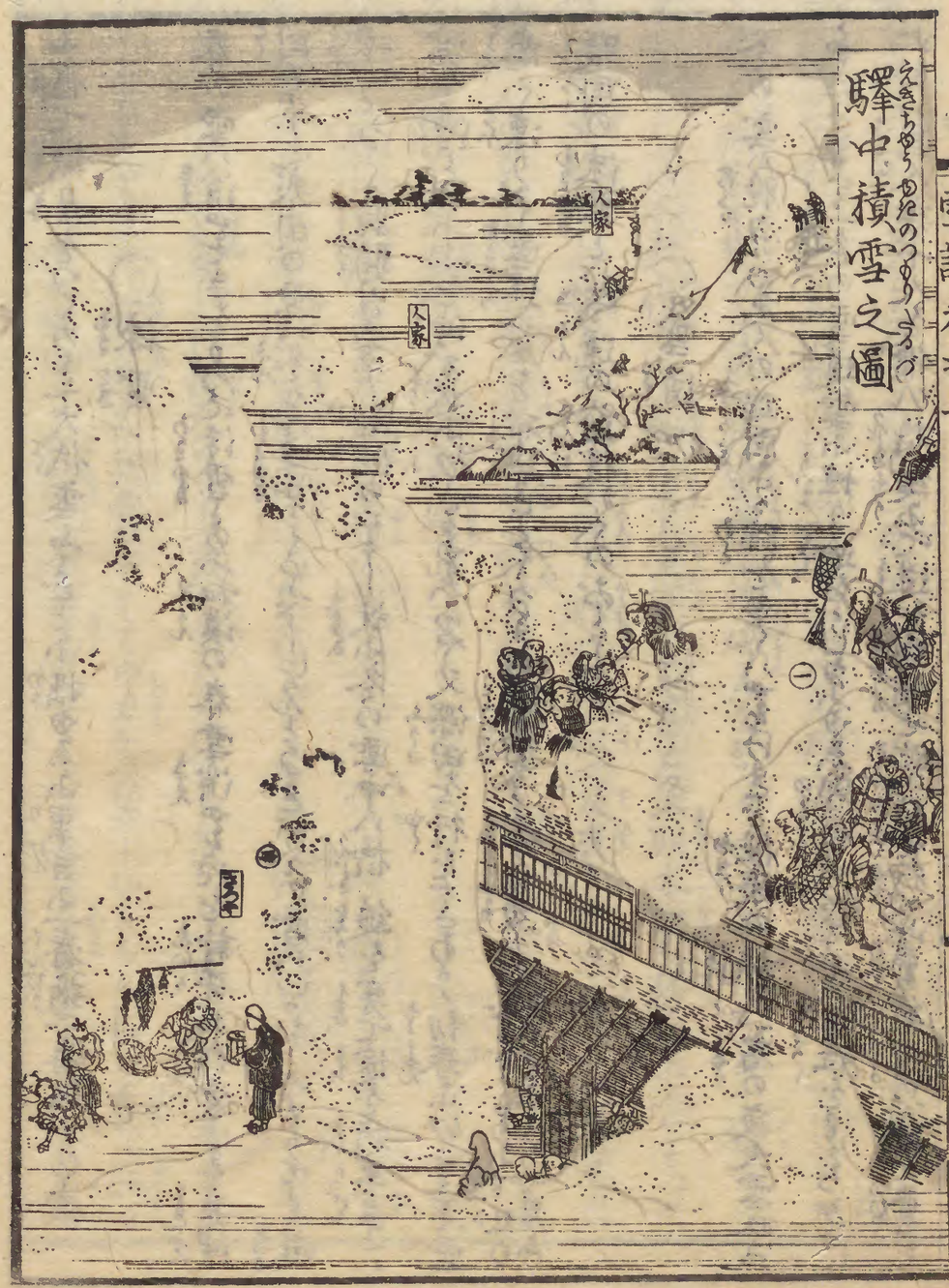
○雪道

冬の雪ハ脆ゆゑ人の蹈固ゆる跡をゆくハ往来の旅人一宿の夜大雪降バ

ゆゑかゆゑゆる一条の雪道雪ゐ埋り途をしるゆゑ郊原ゐいゑてハ方位をもちゐし

此時ハ里人幾十人を傭ひ撓縫ゆゑ道を蹈開せ跡ゐ随て行ゑ此費幾緡の銭を費を

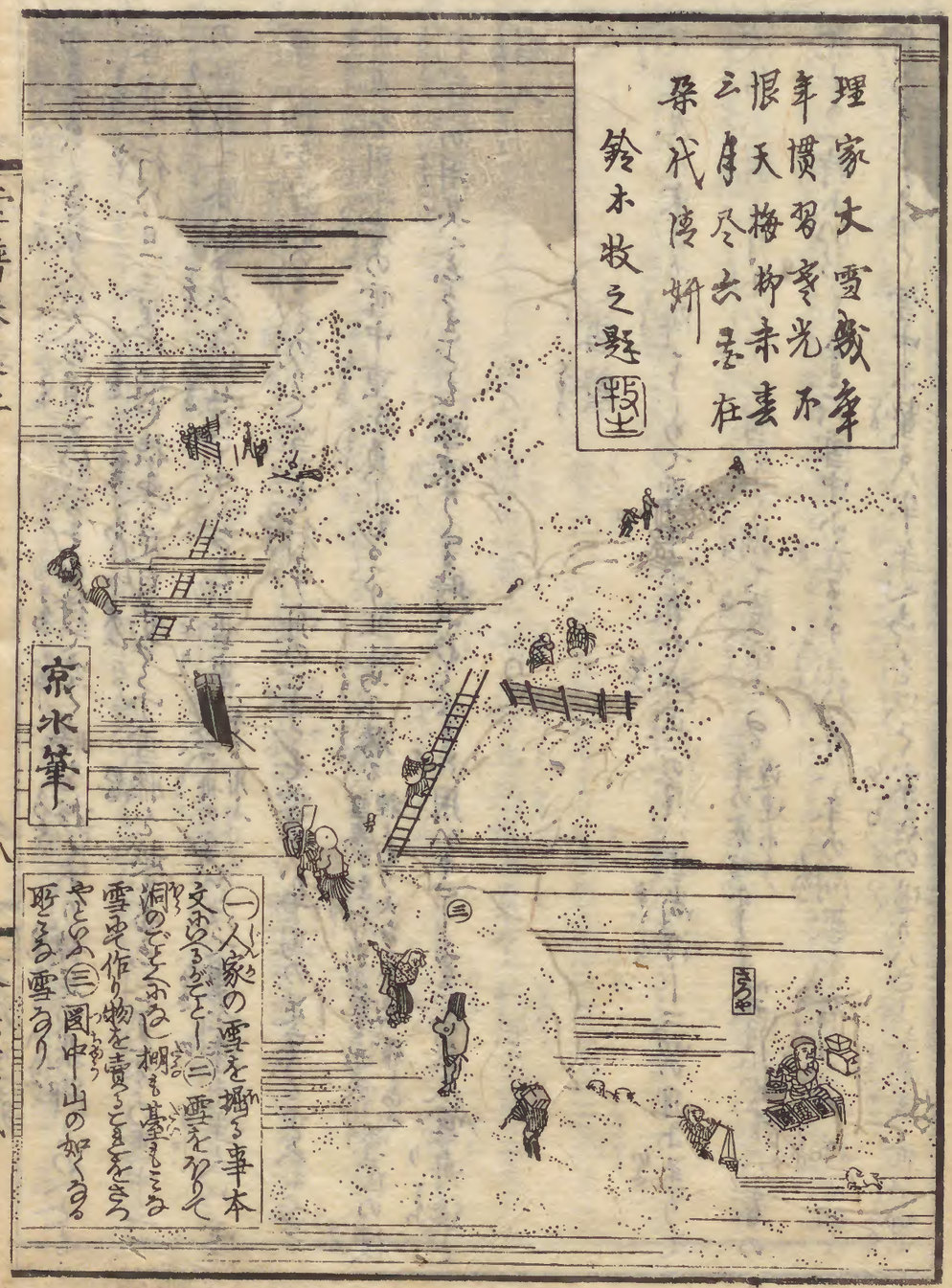
驛中積雪之圖



理家丈雪戰年年慣習寒光不恨天梅枯未妻之身尽去是在梁代陳姓

鈴木牧之題

京水筆



(一)人家の雪を掘る事本文のごとし(二)雪をうりて洞のごとくかこ柳も墓もこみ雪屯作り物を責ることをきろやとふ(三)園中山の如くなる所とる雪なり

ゆゑに貧しき旅人ハ人の道をひらくを待て空く時を移すあり健足の飛脚とゐへども雪途を行ハ一日二三里ハ過ぎ難ゆて足自在ならず雪膝を越すゆゑに冬の雪中一ツの歎難し春ハ雪凍て鏃石のごとくなるゆゑ雪車又雪舟の字を以て重を乗せ里人ハ雪車ハ物をのせおのせものりて雪上を行ゆ舟のごとくも雪中ハ牛馬の足立ざるゆゑまべさく雪車を用ふ春の雪中重を負しもるゆゑ牛馬ハ勝る雪車の制作別ハ記を形大小種あり大なるを徴羅しふ雪国の便利第一の用具とゐへども雪凍りしる時ハわるざるべ用ひがたしゆゑハ里人雪舟途と唱ふ

○雪蟄

凡雪九月末より降そめて雪中ハ春を迎正二の月ハ雪尚深し三四の月ハ至りて次第ハ解五月ハひらけて雪全く消て夏道となる年の寒暖ハ遅速あり四五月ハひらけるべ春の花ども一時ハひらくさきべ雪中ハ在るゆ凡八ヶ月一年の間雪を看ざるゆ僅ハ四ヶ月ゆゑども全く雪中ハ蟄るハ半年ゆゑ家居の造りハさらに萬事雪を禦ぐを専とし財を費力を尽すの紙筆ハ記しがたし農家ハ夏の初より秋の末までハ五穀を収るゆゑ雪中ハ稲を刈ゆあり其忙きゆの千辛万苦暖国の農業ハ比べもなく百倍なるべとて雪国ハ生る者ハ幼稚より雪中ハ成長するゆゑ蓼中の辛を知らざるごとく雪を雪とも思ハざるハ暖地の安居を味ざるゆゑ女ハさらに男も十人ハ七人ハ是を知らもなども住ハ都として鼻花の江戸ハ奉公もするゆ年ありて後雪国の故郷ハ帰る者ハ是もまた又十人ハ七人ハ胡馬北風ハ嘶き越鳥南枝ハ巣くふ故郷の忘がたハ世界の人情なれ雪中ハ廊下ハ雪垂を掛ふ下ハ雪吹を防ぐ窓も又雪を用ふ雪ふるる時ハ巻て明をとる雪下るゆ厳ゆる時ハ積る雪家を埋て雪と屋上と均く平ハうり明のとるべき処なく昼も暗夜のごとく燈火を照して家の内ハ夜昼をわかず漸雪の止る時雪を掘て僅ハ小窓をひらき明をひく時ハ光明赫奕なる佛の国ハ生るごとく此外雪篭りの艱難さめぐるべきなどぐ一ケ月ゆゑ鳥獣ハ雪中食无をもとして雪浅き国へ去るもあれど一定なるべ雪中ハ籠り居て

朝夕をうもるものハ人と熊大猫ん

○胎内潜

宿場と唱ふ所ハ家の前ふ庇を長くのべて架る大小の人家をさくかくのごとく雪中ハさゝゝ平日も往来ともとまりて雪中の街ハ用をなさ如くうまゞ人家の雪をとふ積次第ふ重て両側の家の間ふ雪の堤を築くるぶ如くとふ於て所ゝふ雪の洞をひらき庇より庇ふ通ふこゝを里言ふ胎内潜とのふ又間夫とハ金掘の方言なりを借て用ふるゝ

猶夫の本義ハ妻妾の姦外の家の続ざる処ハ庇をけまバ高低をなくしるかの雪の堤を往来妊淫をのふ

ともに人の足立ざる処わまバ一条の道を開き春ふいたり雪堆き所ハ壇層を作りて通路の便とし形匣階のごとく所の者ハこゝを登下もるふ脚ふ慣て一歩もあやまらずして他国の旅人をゞ怖るゝ移歩かつて落る者あり雪中ふ身を埋む視る人ハこゝを笑ひ落るものハこゝを怒るかゝる難所を作りて他国の旅客を労ハしむるゆゑ求ふる形為ふわゝず此雪を取除ともるゆハ人力と銭財とを費をゆゑす導ハ壇状作りて途を開くこそもゝ初雪より歳を越て雪消るまでのゆ紀繁細ふ記ざ小冊ゆハ尽しがたきゆゑふ省てあらざる事甚多し

○雪中の洪水

大小の川ふ近き村里初雪の後洪水の災ふ苦むるゆあり洪水を此国の俚言ふ水揚とのふ余一年関とのふ隣驛の親族油屋が家ふ止宿せし時頃ハ十月のすゑゆゑ雪八九尺つもりくるをりゝ夜半ふいたりて近隣の諸人呼び呼びつゝ立騒ぐ声ふ睡を驚しこハ何ゆゑぞと問もをどりて卧ゝ間をえもの出ざ家の主両手ふ物を提水わゝゝとゝ裏の堀揚へ立退ぬくとのハをて持る物を二階へ運びやく勝手の方へ立のでゝをゞ家内の男女狂乱のごとく駈まゝりて家財を水ふ流さゞと手當をゞのふ取退る水ハ低ふ随て潮のごとくかゝりて已ふ席を浸し庭ふ溢る次第ふ積る雪所として雪ゆゝざるハゆゝ雪光晴夜を照して水の流るゆゝ見ゆゝ所ゝしさいとゝんとゝゝ余ハ人ふ助けゝまて高所ふ逃登り遥ふ驛中を眺バ提灯炬を燈しつゝ

大勢の男ども手ごとに木鋤をかたげ雪を越水を渉て声をあげてこゝに来るもあれバ
水揚せざる所の者どもこゝに馳あつまりて川筋を開き水を落さんとする闇夜なれバ
まぐハ又えなど女童の泣叫ぶ声或ハ遠く或ハ近く聞もあはれのありさまなり燃
残りたる炬一ツをたよりに人も馬も首たけ水に浸り漲るながれをわたりてゆくハ馬を助
んとするに帯もせざる女片手に小児を脊負提灯を提て高処へ逃のがるハ近けれバ
そこらあたりにハ人も命とつりがへなれバなにをも恥しとハおもへべうし可笑事
可憐なるも可怖きも種々さまぐ筆に尽しがたしやう〳〵東雲の頃に至り
て水も落さりしと諸人安堵のおもひをなしぬ〇そも〳〵我郷雪中の洪水大かたハ
初冬と仲春とにあり此関といふ駅ハ左右人家の前に一道づゝの流あり末ハ魚野川へ
落る三伏の旱にも乾くことなき清流水なれバ家毎に此流を以て井水の代りとし
或ハ桶にても汲べき流なれバ平日の便利井戸よりもまさるに勝りしかるに初雪の
後十月のころまでにハこの二條の小流雪の為に降埋られ流水ハ雪の下にあり 故

に家毎に汲べき程に雪を穿て水用を弁ずこの穿る所も一夜の雪に埋られてもと
あまたゞ再うがつ事屡なり人家にちかき流さへかくのごとくなれバこの二條の流の
水源も雪に埋れ水用を失ふのミならず水あがりの懼ある也此所の人力を併て流
のかゝり口の雪を穿るなりされども人毎に業用にさゝへる時を失ふ故又ハ一夜の大
雪にかの水源を塞ぐ時ハ水溢て低所を尋て流る駅中ハ人の往来の為に雪を踏へ
して低ゆゑ流水漲り来り猶も溢て人家に入り水難に逢ふ事前にいへるがごとし
幾百人の力を尽して水道をひらかざれバ家財を流し或ハ溺死にもおよぶもあり〇又
仲春の頃の洪水ハ大かたハ春の彼岸前後ハ雪いまだ消ず山々ハさら也田圃も渺々
たる曠平の雪面なれバ枝川ハ雪に埋れ水ハ雪の下を流れ大河といへども冬の初より
岸の水まづ氷りて氷の上に雪をつもらせつもる雪もおなじく氷りて岩のごとく岸の
氷りたる端次第に雪ふりつもりのちにハ両岸の雪相合して陸地とおなじ雪の地と
なるさて春を迎へて寒気次第に和ぎその年の暖気につれて雪も降止る二月

雪中洪水の之圖

京水作

の頃水気ハ地気よりも寒暖を知るゆえなるかの水面ハ積りする雪下より解て凍りする雪の力も水わちらハ弱くなり流ハ雪ハ塞ぎて狭くなりくるゆえ水勢ますます烈しく陽気を得て雪の軟なる下を潜り堤のきるごとく聳ハいふ寝耳ハ水の災難ハあるゆ雪中の洪水寒国の艱難暖地の人憐ぬべし右ハ其一をいふの雪中の洪水地勢ハよりて種々各異り詳ハ弁ずべし

○熊捕

越後の西北ハ大洋ハ對して高山ゆ東南ハ連山巍々として越中上信奥羽の五ヶ国ハ跨り重岳高嶺肩を並べて数十里をなす大小の獣甚多し此獣雪ゆ避て他国へ去るもあり去ざるもあり動ぜして雪中ハ穴居するハ熊のごとし熊膽ハ越後を上品とす雪中の熊膽ハことさらハ價貴し其重價を得んと欲して春暖を得て雪の降止るころ出羽あるいハ瞰師ども五七人心を合せ三四疋の猛犬を牽き米と塩と鍋を貯へ水と薪ハ山中在るハ随て用をなし山より山を越昼ハ猟して獣を食

て夜ハ樹根岩窟を寝所とす生木を焼て寒を凌且明るくして着さまゝ寝ぬ寝所をなす頭より足ハいるまで身ハ着る物悉く獣の皮をもつてこれを作る遠く視るハ猿ハ人ハ人也金華を往ハもとハかゝる人をやいふべき此者らが志所ハ我国の熊ハありとて我山中ハ入り場所ゆきを見立木の枝藤蔓を以て假ハ小屋を作りこれを居所とす一ハ犬を牽四方ハ別て熊を窺ふ熊の穴居する所を認バ目幟をのこして小屋ハ入り一連の力を併て是を捕るその道具ハ柄の長さ四尺斗りの手鎗或ハ山刀を薙刀のごとく作りくるゆの鉄炮山刀斧の類と刀鉈る時ハ斯ハ砥をもつて自研ぐ此道具も獣の皮を以て鞘とす此者ら春ハもかぎて冬ハ山ハ入るをもつとも

熊ハ和獣の王猛くして義を知る菓木の皮虫のるゆを食として同類の獣を喰ぶ田園を荒ぶ稀ハ荒ぶ食の尽る時ハ詩經ハ男子の祥とす或ハ六雄将軍の名を得るも義獣なるべし夏ハ食をもとゆの外山蟻を掌中ハ探着冬

の蔵塾ゆへこれを謀て飢を凌ぐ牝牡同く穴ゆへ繋らべ牝の子あるハ子とゆへ
ゆへくとり其蔵塾なる所ハ大木の雪頽ゆへ倒れて朽る洞ゆへ又ハ岩間土
穴なれど心ゆへ隨て居る処さまざまく雪中の熊ハ右のごとく他食を求ざるゆへその
膽の良功あるゆへ夏の膽ゆへ比べ百倍と我国ゆへ●飴膽●琥珀膽●黒膽と唱へ色を
もつてこれをゆへ琥珀を上品とし黒膽を下品とし偽物ハ黒膽ゆへ多し

●さて熊を捕ゆへ種この術あり かなべ居所の地理ゆへ考て捕得ぬ術をゆへ
熊ハ秋の土用より穴ゆへ入り春の土用ゆへ穴より出るとゆへ又一説ゆへ穴ゆへ入りてより穴を
出るまで一睡ゆへ絶るとゆへ人の視ざるところゆへ信じがたし
沫雪の條ゆへいへるごとく冬の雪ハ軟ゆへ足場あり死ぬる熊を捕ハ雪の凍る春
の土用まへなべ穴より穴のでんとする頃を揑よる時節とする岩壁の裾又ハ大樹の根
ゆへ蔵塾なるを捕ゆへ壁とゆへ術を用ふ天井釣もゆへその制作ハ木の枝藤の
蔓ゆへ穴ゆへ倚掛て棚を作りたるの端ハ地ゆへ付て杭を以てこれを縛りたるの

横木ゆへ柱ありて棚の上ゆへ大石を積ゆへ横木より縄を下し縄ゆへ輪を結ひて
穴ゆへ臨てこれを蹴綱とゆへ此蹴綱ゆへ轉機あり全く作りをりてのち穴ゆへのぞん
で玉蜀黍烟艸の莖のゆへ熊の悪む物を焚ちゆへ扇て烟を穴ゆへ入るべ熊恐りゆへ
嘻て大ゆへ怒り穴を飛出る時かの蹴綱ゆへ轉機ゆへ棚落て熊大石
の下ゆへ死ぬ手を下さずして熊を捕の上術と是ハ熊の居所ゆへよくこれを推夫を
折ゆへよりてハ生るなり

又熊捕の場数を踏て剛勇の者ハ一連の獵師を熊の居る穴の前ゆへ待せ己一人
ひろく蓑を頭より被り ひろハ山ゆへ艸の名なるゆへ作るべ穴ゆへそろくと這入り熊ゆへ
蓑の毛を觸るべ熊ハこれ毛を嫌ふゆへ除て前ゆへ出む又後ゆへこれの毛を障ぬ
熊又まへゆへ穴ゆへ入りて穴の口ゆへ居ることを視て待かまへる
獵師ども手練の鎗尖ゆへ受けて突留る一鎗失ときハ熊の一撲ゆへ一命を失ふその危を
踏ぐ熊を捕ハ僅の黄金の為之金慾の人を過ぬ色慾よりも甚しさまべ黄金ハ

道を以て得べし道をもつて得べくば
又上ハ覆ふ所あり〻その下ハ雪のつもるを知り土穴を掘て繫るもあり然れ
どもてハも雪三五尺ハ吹積て熊の穴ある所の雪ハ入るべ〻ず細孔ありて管のごと
こと熊の気息ゆ〻雪の解さる孔を獵師ことをうんとべ雪を掘て穴をあらハし
木の枝柴のゆるを穴ハ挿入まべ熊ことを揉とりて穴ハ入て穴ハ入るべ〻ず
バ穴逼りて熊穴の口ハいづる時鎗ハかゝる突こうとうまべ数疋の猛犬いちどハ飛かゝ
て齧つ〻犬ハ人を力と〻人ハ犬を力と〻殺もあり此術ハ控木ハこゝろ〻ゆるハそ
もるるなり

○白熊

熊の黒ハ雪の白ごと〻天然の常なれども天公機を轉じて白熊を出せり
○天保三年辰の春我が住奥沼郡の内浦佐宿の在大倉村の樵夫八溪山ハ入り
時いろハ白き児熊を虜り世ハ珍〻飼ひきしハ香具師江戸ハ見世物の
師の古風なるもの

ことを買ものゝ市場又ハ祭礼ごと〻人の群る所へいで者物ハせ〻ある所へ
余もてつるハ大さ狗のごと〻状ハ全く熊ハ〻して白毛雪を欺き光澤ありて
天鵞絨のごと〻眼と爪ハ紅ことく人ハ則ち〻愛べ玩りのごとか〻ハ持
あるきしるその終を考へべ白亀の改元白鳥の神瑞ハ幡の鳩源家の旗もべ〻
白きハ　皇国の祥象なまべ天機白熊をいづ〻も　昇平万歳の吉瑞ハ
山家の人の話ハ熊を殺ること三疋或ハ年歴る熊一疋を殺も其山ゆ〻
も荒るゆあり山家の人ことを熊荒ことのゆるハ山村の農夫ハ霜て熊
を捕るゆ〻ことのり熊ハ灵あり〻事古書ハもいえとり

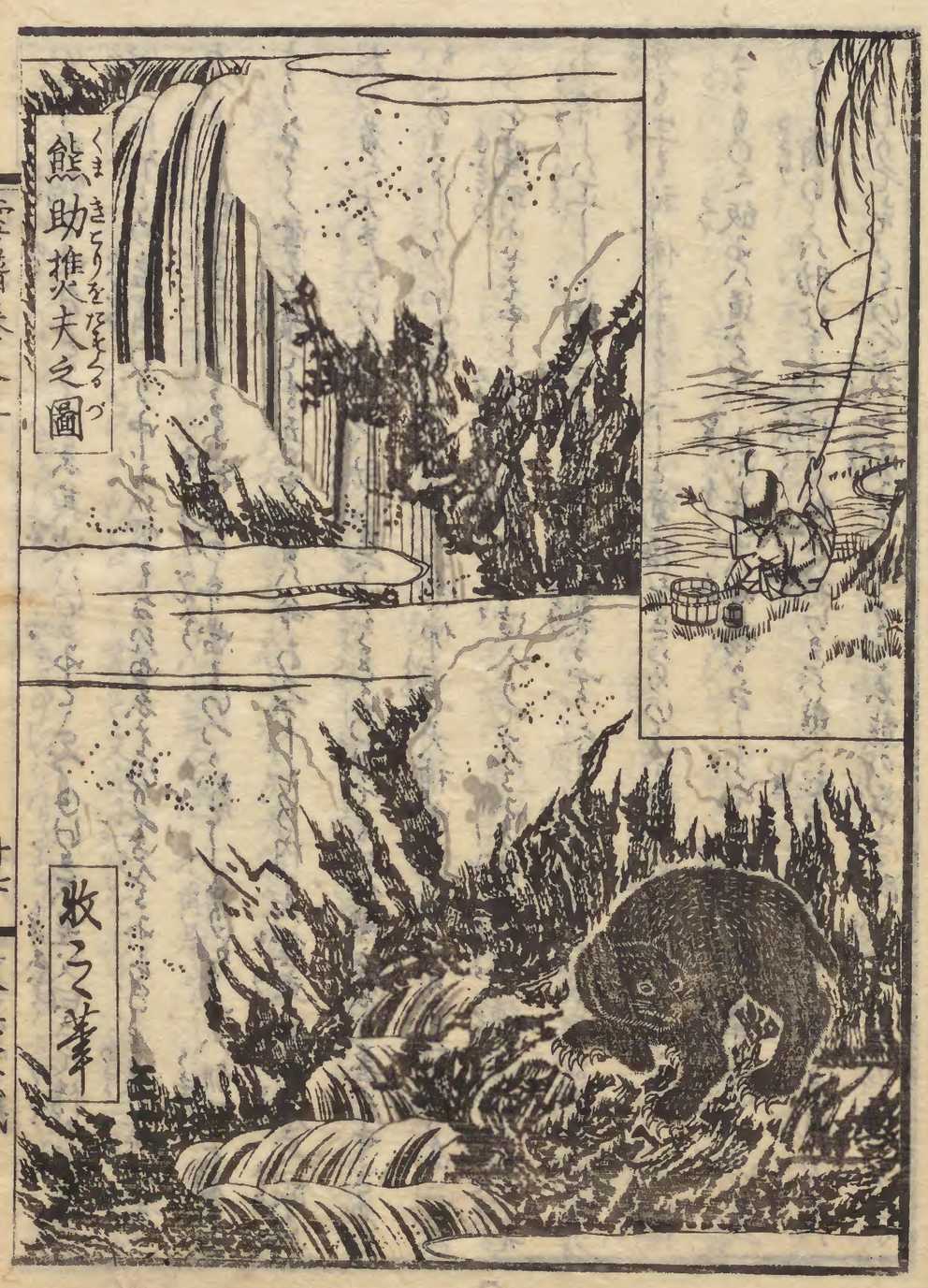
○熊人を助

人熊の穴ハ陰〻熊ハ助らまし〻ことのハ話諸書ハ散見ことも其実地をふ
る人の語り〻ハ珍けまべたハ記を○余若り〻時妻有の庄ハ奥沼郡の
用あり て両三日逗留せ〻事あり 比頃ハ夏なり〻ゆゑ客舎の庭の木うげハ

筵を敷きて納涼居りし主人は酒を好む人にて酒肴をこゝに開き余は酒をば嗜まざる由にて茶を喫して居たりしに老夫こゝに来り主人を視て拱手して礼をなし後園に行んとせしを主呼とめ老夫を指さしいまう此典父は壮年時熊に助られたる人にて危き命を拾ひ今年八十二まで健に長生せるは可賀老人と識面の初めにて老夫莞爾として再会んと云余よびとめ熊に助らるゝ珍説を語りて聞せのゝしいひしに主人余が前に在て茶盌をとりてまづ一盃喫して酒を満盌とつぎけるに老夫筵の端に坐して酒を視て笑をふくみて続て三盌を喫して吉鼓して大に喜びさらば話説中さん我廿歳二月のすゑの薪をとりんとて雪車を引て山に入りしに村にちらほら所々皆伐つくしてまくあるも足場わるく由にて山一重踰てつゞるに新と見へたる柴あまたあるを自在に伐とり雪車に高うひもゝ徐に束雪車に積て縛つけ山刀をさしのべ低に随て今来りし方へ乗下りしに束の柴雪車より転び落谷を埋る雪の裂隙に

凍りて雪陽気を得て裂るゆ常に飯んも惜くまでその所に居りし柴の枝に手をかけ引上んとせるに動ず落る勢に撞られて引こもうんさらば重くとり引上んと匍匐して双手を延て一声うけて上んと志る時足に蹈力なく由にて自ものまぶちにに已が躰を雪の上に薄落る由にて幸に疵はなけれども夢のやうにぼうとして心付上をうかがへば雪の屏風を建るごとく今にも雪頽やせんと下に居りて生る心地はなく暗にくらくせめて明方にいでんと雪に埋る狭谷間をつゝやうくに空を見る所にて谷底の雪中寒烈にして手足も亀手一歩もとびがたくして凍死べしと心を励して猶途もあるべき百歩ばかり行けん滝ある所にて四方をみるに谷間の途極て甕に落る鼠のごとくいかんともせんすべなく悶然として自身せまりいかでせんといふ思案さへ出ざりしさて是より熊の話に今一盃とすゝめて自酌して喫腰より烟艸を

老農の語る往事の圖
京水筆


熊助推火夫之圖
牧之筆

いごーて烟を吹うどもるゆゑ其次ハいろゆとろづゆけまべ差父曰さて傍を見まべ潛づたわどの岩窟あり中ゆハ雪もなゆ也ひりてゑるゆもとー温こ此時まで
うづきまく腰をさぐりとるゆ握飯の弁當もいつらいもとーとりかくてハ飢死まぐー
さりゆづづ雪を喰ても五日や十日ハ命あるべーその内ゑハ雪車哥の声さへ聞まべ
村の者こ大声あげて叫らば助くまべーそまゆつけてもい伊勢さゑと善光寺さゑを
いこのこゆりわうゆーと志きりゆ念佛唱へ大神宮をいのり日もくまかりし也ゑ
こーを寝所ゆせぐやと闇地を探りくー這入りてゑるゆ次第ゆ温こ猶も探りー手先
ゆ障ーハ正ーー熊こ愕然ーて胴も裂るやうこーぐ逃ゆ道ゆくーこーても命の期ゆ
死も生も神佛ゆまうまべーと覚悟をきハめいろゆ熊どの我ハ新とりゆ来り谷へ落
こるものこ飯ゆ道ゆゆく生て居ゆ喰物ゆーーても死べき命こ擘て殺ばこ
ゆー情あーば助なまーと怖こ熊を抚けまべ熊ハ起ゆりこるやうゆそありしゆまば
ーありてもこりゆ我を尻ゆてかー

ゆ巨燵ゆわーるゆーこ全身わーこまりて寒をゆとにまーー也ゑ熊ゆさあーー礼を
のべ猶もなをけ玉へと種こ悲ーゑゆ熊手をあげくー我が口へ柔ゆあー
あてるゆなびくくーゆゑ城のゆをもゆひーー誑くこまばすくてもとー苦ーまゑ
りゆるゆまこまば心爽ゆあり咽も潤ひーゆ熊ハ鼻息を鳴して寝やうくさてハ我を助る
ゆーんと心大ゆもちつきのちハ熊こ脊をゆくべく卧ーゆ宿のゆをのこゆりて眠気も
つくべくりひくーてのちハいつゆ寝入こりかくて熊の身動をそゆるゆ日さめてこまば穴の
口ゑ入ゆゆゑ夜の明こる成こり穴をそひひーやうるべき道もあるゆ山ゆのゆるべき
藤づるゆてもあーこまとあちこちゆまとどるゆーー熊も穴をひて滝壺ゆいこり水をのこ
ーー時ゑ目めて熊を見まば犬を七ッもよせこるゆどの大熊こ又ゆこの窟へこりーー也ゑ
我ハ窟の口ゆ居こ雪車哥のこゑやもこんと耳を澄て聞居こりーゆ滝の音のこ
ゆて鳥の音もきこまばこの日もなをくー暮こ又穴ゆ一夜をあーー熊の掌ゆ飢を
このゆ幾日こりてゆ哥ハきこまばこの心細きゆいんこりーーこまど熊ハ次第ゆ馴

可愛がりしと語るうち主人は微酔して老夫にむかひ其熊は牝熊ではなかりしかと三
人大ひに笑ひ又酒をのませ盃の献酬にまぎれて話消たるゆゑ強て下回をたづねければ
老夫曰人の心は物にまぎれてかはるものゆゑそれがし熊に逢し時はもはや死地なりと覚悟をきはめ
たれば命も惜くなかりしが熊に助られてのちは次第に命がをしくなり助る人はなく
とも雪さへ消なば木根岩角に縋てなりとも宿へかへらんと雪のきゆるをのみまちわびし幾日
といふ日さへ忘て虚くくらしゝが熊は飼犬のやうになりてそれがしを人間の貴ことを知り
谷間のゆゑ雪のきゆるも里よりは遅くたゞ日のたつをのみまちしくありしに一日窟の口の
日のあたる所に虱を捫て居たりし時熊窟よりいで袖を咥て引しゆゑいかにするかと引まゝ
ゆきしにそれよりも深落なる所にいたり熊前にたちて自在に雪を搔掘一道の途をひ
らく何方までゆくとおもひながらゆけば又途をひらきひらきて人の足跡ある所にいたり熊四方を
顧て走り去て行方しれずなりそれは我を導たるなりと熊の去し方を遥拝しつゝ礼を
のべさまざまに神佛の御蔭なれば伊勢さまを善光寺さまをも遥拝しまうして足の

蹈所もしらず火點頃宿へかへりしに此時近所の人々あつまり念仏申てゐたり両親
それがしを悄然せるを幽灵ならんとて立さわぐそのはづ月代は蓑のやうにのび面は狐
のやうに痩たり幽灵とて立さわぎしものちは笑となりて両親はさら也人々もよろこび
薪とりにいでし四十九日目の待夜とていとなみたる佛事も俄にめでたき酒宴となり
しと仔細に語りしは九右衛門といひし小間居の農夫なりき其夜燈下に筆をとり
て語りしまゝを記しおきしが今はむかしとなりけり

○雪中の虫

唐土蜀の峨眉山には夏も積雪あり其雪の中に雪蛆といふ虫あること山海経に見
えたり唐土の書此説空ならず越後の雪中にも雪蛆あり此虫早春の頃より雪中に生じ
雪消終れば虫も消終る始終の死生を雪と同うす字書を按に蛆は腐中の蠅とあれば所
謂蛆蠅の蛆は蠆の類人を螫とあれば蜂の類也雪中の虫は蛆の字に從ふべしあるひは雪蛆
は雪中の蛆蠅也木火土金水の五行中皆虫を生ず木の虫土の虫水の虫は常に見る所めづ

らしむるぞ蠅は灰より生ぜ灰は火の燼末なれバ蠅は火の虫也蠅を殺して形あるもの灰中
におけバ蘇る又蚕は人の気より生ず熱は火也火より生ずる虫ゆゑに蠅も蚕も共に暖なるを好
むなり金中の虫は肉眼におよばざる冥塵のごとき虫ゆゑに人これをしらざれど、およそ銅鏡の腐
むしばむは虫を生ず虫の生ずる所色を変ずるしるしなりこれを拭へば虫をころすゆゑ其所腐ず錆
は腐の始錆の中かならず虫あり肉眼におよばざる虫ゆゑ人しらざる也蘭人の説く金中猶虫あり雪中
に虫無んや。しかれども常をもつてすれバ奇とし妙として唐土の書にも記せり我越後の雪蛆は
ちひさき事蚊の如し此虫は二種あり一ツは翼ありて飛行一ツは翼なく蚑行共
に足六ツあり色は蠅に似て淡く一は黒し其居る所は市中原野蚊におなじしかれども
人を螫ことなし。ちかごろ験微鏡をもつて
視る所をここに図して物産家の
説を俟つ

○雪蛆の図

此虫夜中は雪中に凍死るがごとく日光を得れバたちまち▲

○雪吹

雪吹は樹などに積りたる雪の風に散乱するをいふ其状優美なるものゆゑ花のちるを
是に比して花雪吹といひて古哥にもあまたよみたり是東南寸雪の国のことなり
北方丈雪の国我が越後の雪深きところの雪吹は雪中の暴風雪を巻騰颺雪中第一
の難儀これが為に死する人年々なり。その一ツを挙て寸雪の雪吹のやさしきを
観人の為に丈雪の雪吹の愕胎を示す
余が住塩沢に遠からざる村の農夫男一人あり篤実にして善く親に仕ふ廿二歳の冬
二里あまり隔たる村より十九歳の娵をむかへしに容姿憎からず生質柔従にて糸織
の伎にも怜利なれバ舅姑も可愛がり夫婦の中も睦く家内可祝春をむかへ其年
九月のはじめ安産してしかも男子なりけれバ掌中に珠を得たる心地にて家内
悦びいさみ産婦も健に肥立乳汁も一子に餘るほどなれバ小児も肥太り可賀名を
つけて千歳を寿けり此一家の者すべて篤実なれバ耕織を勤行小農夫なれど

国立公文書館
National Archives of Japan

も負うゝび善男をもち良嫁をむかへ好孫をまうけうとて一村の人と常に羨り
かゝる善人の家に天災を下ゝしハ如何ぞや〇かくて産後日を歴てのち連日の雪
も降止天気穏なる日嫁夫にむかひ今日ハ親里へ行んとおもふいかゝやせんとゝふ 男
旁にありてそハよからぬ事と男も行べし実母へも孫をみせまゐらせ夫婦しゝく自
慢せんとの嫁いうもゝ名ゝつゝ姑にかくとのゝバ姑ハ俄に土産なんど取そろへる間に嫁
髪をゆひなどして晴の衣類を着し綿入の木綿帽子も寒国の習として見わく
らゝび児を懐にいだき入んとせるを姑亦よりよく乳を呑せていだいまよ途に
てハ祝ん祝ぐのこゝろゆくうゝんと一言の詞にも孫を愛する情ぞあらまほしる夫ハ蓑笠
搗脚衣もんべを穿晴天にも蓑を着ハ土産物を軽荷に擔ひ両親に暇乞をなし
夫婦袂をつらゝ祝喜躍て立出ゝり正是親子が一世の別と後の悲難とハ
けり〇さるにてもこの夫ハ先に立妻ハ後にあとがひやゝをつとつまゐいふ今日ハ頃日の
日和とよくこそあめひさちとまと今日夫婦孫をつれまゐ来るべしとハ親さちハ

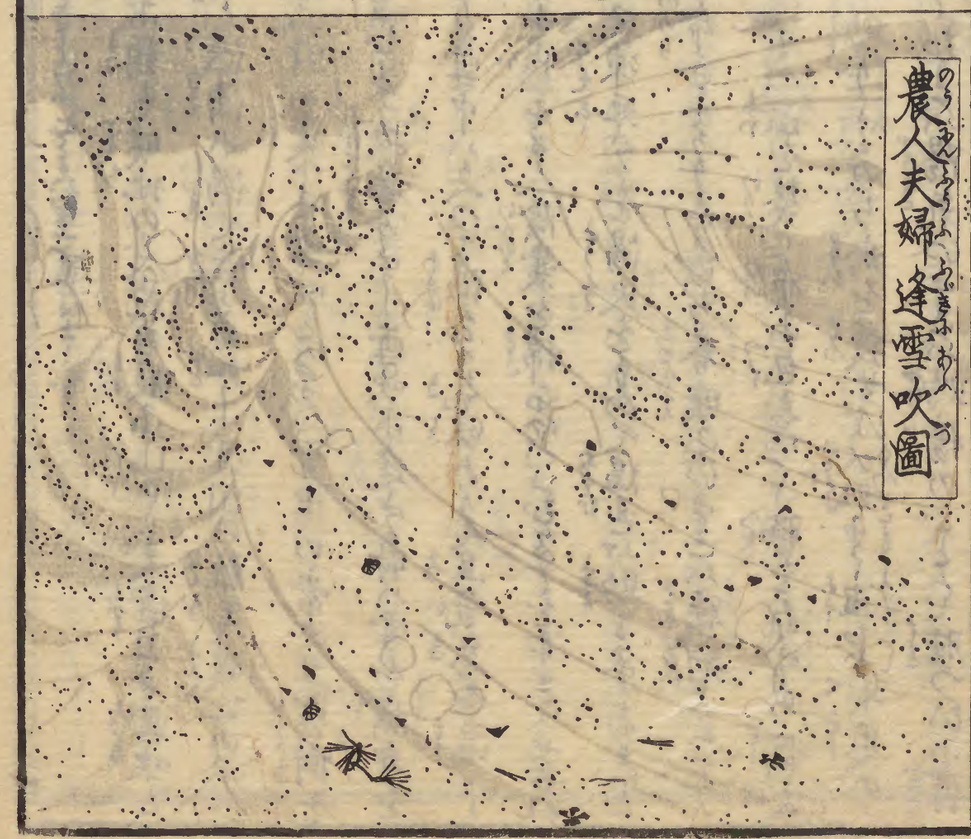
まと玉ふまゝ孫の顔を見玉ひさぞりとよろこびのゝうんさまとバかい父翁ハいつ
ぞや来らまとゝが母人ハいまゝ赤子を見ぬハざるゆゑことさらの喜悦ゆゝうん遅
なりバ一宿てもよろうんゝ郎も宿ぬ不可也二人とまりなバ両親楽ぬうんまとハ
飯ぐゝなどまゝの間児の啼ぬ乳房くませつゝうちつまて道をいそぐ美佐嶋と
いへ原中に到ゝ時天色倏急に変り黒雲空に覆ひけまバ是雪中の常と夫空を見ゝ
大に驚怖こハ雪吹なんいゝバせんと躊躇うち暴風雪を吹散る巨濤の岩を越
るゞごとく颪雪を巻騰て白竜峯に登ごとゝ朗とゝりゝも掌をうへにごとく天
怒地狂寒風ハ肌を貫の鎗凍雪ハ身を射の箭と夫ハ蓑笠を吹とゝまと妻ハ帽子を
吹ちぎらまと髪も吹ちぎらまと吐嗟とゝふ間に眼口襟袖ハさゝと裾へも雪を吹いまと 全
身凍呼吸迫り半身ハ已に雪に埋めらまゝゞ命のなぎりなまバ夫婦声をあげ
わゝいゝくと哭叫ども往来の人もなく人家にも遠けまバ助る人なく手足凍て
枯木のごとく暴風に吹僵まと夫婦頭を並て雪中に倒まと死けり此雪吹其日の

暮ハ止次日ハ晴天なりけるに近村の者四五人此所を通りかゝりしに死骸ハ雪吹に埋られたるなれども赤子の啼声を雪の中にきけるに人〻大に怪しみて掘出さんとするも在しが剛気の者雪を掘さくるにまづ女の髪の毛雪中に顕れ扨ハ昨日の雪吹倒されたるなんと里言に所とて皆あつまりて雪を掘死骸を見るに夫婦手をあひたゞく死居り児ハ母の懐にあり母の袖児の頭を覆ひ居るに児ハ身に雪をかぶり鰐ざるゆゑあや凍死せし両親の死骸の中にわゝと又声をあげてなきたり雪中の死骸なるに生るごとく見知る者あり夫婦なることを聞り我児をいとをしく袖をかゝひ夫婦手をとりあひ死る心のうちかなしみ中〻さもの若者らも泪をおとし児ハ懐にいだき死骸ハ養ふつゝ夫の家に荷ひ帰りしの両親ハ夫婦娘の家に一宿とあこがれひをりしに死骸をえて一言の詞もなく二人ゞ死骸にとりつき額にくちをあてゝ大声をあげて哭るハ聞るも憐のありさまなり一人の男懐より児をいだして結ひ居けるに悲と喜と両行の涙をいとゝしけるとぞ

〈里言に雪吹を吹きとゝ云ハ里言なり〉

雪吹の人を殺すハ大方右に類せる暖地の人花の散に比べ美賞する雪吹と其異なること潮干に遊びて楽と洪濤に溺て苦とのごとし雪国の難義暖地の人おもひやるべし連日の晴天も一時に変じて雪吹となるハ雪中の常なれ其分樹を抜屋を折人家をたゞ為に苦むの抜拳げて雪吹に逢る時ハ雪を掘身を其内に埋るに雪暫時につもり雪中ハ久しく温なる気味あり且気息を漏し死をまぬがるゝあり雪中を歩るく陰嚢を綿にてつゝむをもとゝせざれハ陰嚢まづ凍て精気尽るゝ又凍死するを湯火をもつて温るに助るゆゑあるとも武火熟湯を用ふべからず命にかゝるのち春暖に成るに腫病となり良医も治しがたし凍死するハまづ塩を熬て布に包むべく眼をあてゝ搞火の弱をもつて次第に温べし助りなるのち病を發せば人肌に温むに手足の凍るも強き湯火にあてゝ温るに陽気いまだ灼傷のごとく腫つひに腐

雪中捕熊圖



農夫婦逢雪吹圖

京水筆

国立公文書館 National Archives of Japan

て指をおとせど百薬効なしてこれを我が見る所を記して人に示せ人の凍死せるも手足の亀手も陰毒の血脈を塞ぐのゆへ俄に湯火の熱を以て温まば人精の気血をたすけ陰毒一旦に解るとのゆへども全く去ぬ陰は陽に勝ざるを以て陽気至ば陰毒肉に帰て骨と寒中両雪に歩行て冷る人急に湯火を用ふべからず已ゞ人熱の温ゆるをまつて用ふべし長生の一術なり

○雪中の火

世に越後の七不思議と称する其一ツ蒲原郡妙法寺村の農家炉中の隅石臼の孔より出る火人皆奇とす碑に つゝ諸書に散見せし此火寛文年中始て出しと旧記に元文年間は三百余年の今に いまだ絶ざるゆゑに奇中の奇とす天奇を出せり一ツ越後国の奥沼郡に又一ツの奇火を出せり天公の機状の妙法寺村の火とおなじからざる所あるゆゑに記て話柄とす彼人の知る所是は他国の人の去越後の国魚沼郡五日町より二駅に近き西の方に低き山あり山の麓に小溝在天明年中二月の頃その辺の童どもあつまりてさゝめぐりの戯をなして遊倦木の枝をあつめ火を焚てあたりをとりしに其所より忽ちに火燃あがりけるに児曹大に驚き四方に逃散けりその中に一人の童家に入り事の仔細を親に語るに此親心ある者にてその所に行り火の形状をたゞるに いまだ消ざる雪中に手を入るべきなどの孔を穿て孔より三四寸の上に火燃る熟覧するに つゝ妙法寺村の火のごとし平に妙法寺村の火のごとし火口に石を入てこれを消し家に入りて人に語ぬ雪さえてのち再その所に行てこれを見るに火のもえるは小溝の岸に火燧をもて幾燭に火を点じ試に池中に投いれしに池中に火を出せしなり庭燎のごとし水上に火燃るは妙法寺村の火よりも奇とす駅中の人来りてこれを視るそのち銭に才人かの池のそばりに混屋をつくり筧を以て水をとるごとくして地中の火を引き湯槽の竈

ふ燃し又燈火ゆゑ代る池中の水を湯ふ煙し價を以て浴せしむ此湯硫黄の気ありて能疥癬の類を治し一時流行して人群をなせり ○按ふ地中ふ水脉と火脉とあり地ハ大陰なるゆゑ水脉ハ九分火脉ハ一分なりかるゆゑふ火脉ハ甚稀なり地中の火脉凝結ところかなるゆゑ気息を出さず人の気息のごとく肉眼ふハ見えず火脉の気息ふ人間日用の陽火を加へばもえて焔をなすごとを陰火とのひ寒火とのふ寒火を引ふ筧の筒の焦ざるハ火脉の気ゆゑ陽火をうけて火となるゆゑなる気息なりなるゆゑ陽火をうくるとき筒の口より一二寸の上ふ火をなすことを以て火脉の気息の燃るを知るべし妙法寺村の火も是と是余が幾明ふあらべ古書ふ據て考得る所と

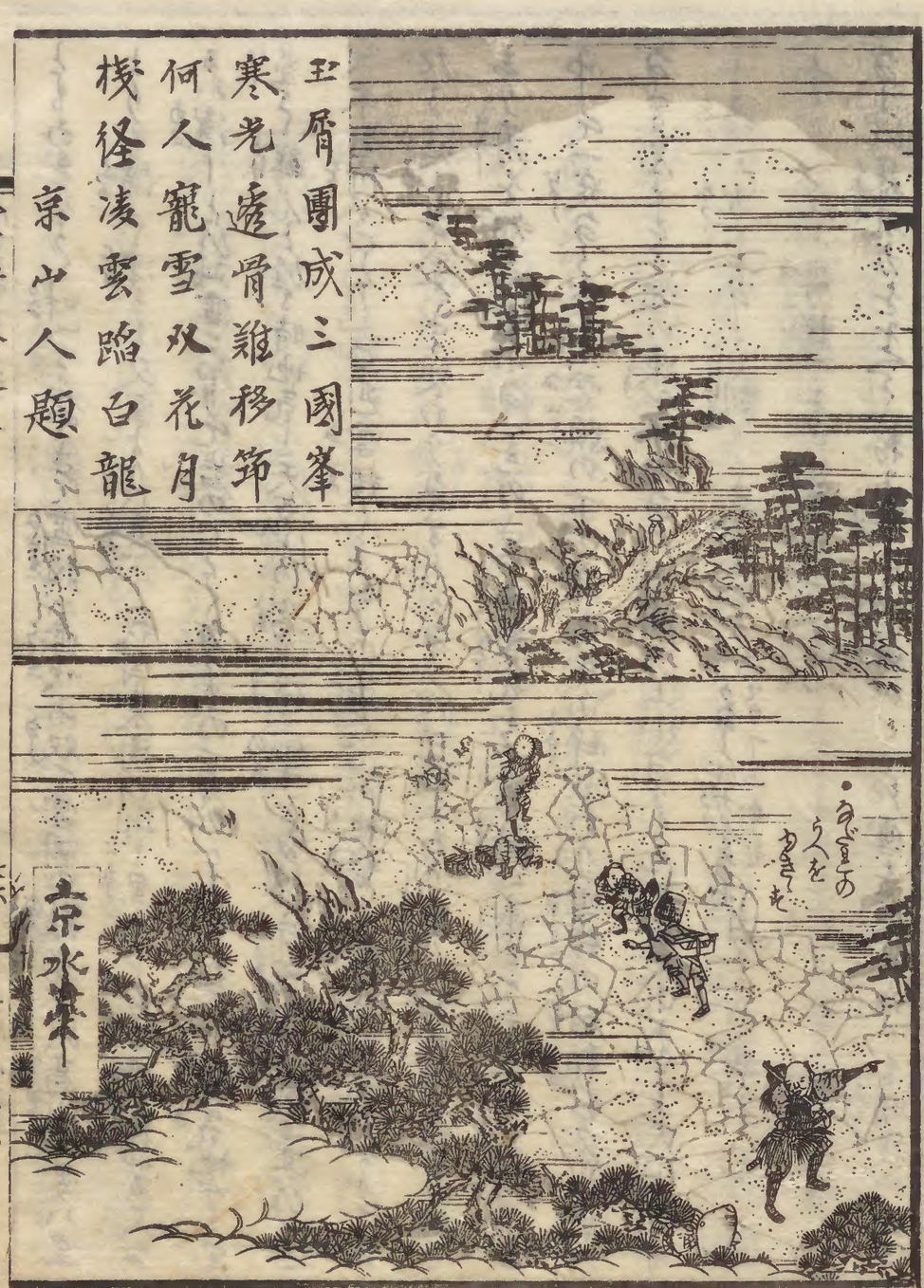
○破目山

魚沼郡清水村の奥ふ山あり高さ一里あまり周圍も一里あまりと山中もべて大小の破隙あるを以て山の名とす山半ハ老樹條をつゝ孫半より上ハ岩石疊ことして其形竜躍虎怒ごとく奇〻怪〻言ひつゝず麓の左右ふ渓川あり合して滝をなす絶景又言ひつゝべき旱の時此滝壺ふ雪もとべるゆゑ験あり一年四月の半雪の消る頃清水村の農夫ら二十人あまり集り熊を狩んとて此山ふのぼりうの破隙の窩をゆゑ所なるゆゑ熊の住處なりと例の番椒烟草の莖を薪ふ交雑ふのべて焚こしふ熊ハさこふ出ず窩の深ゆゑふ烟の奥ふ至るゆゑんと次日ハ薪を增し山を焼よと焚るゆゑふ熊ハそもそも一山の破隙こかことより烟をいごして雲の起ごとくなりけるゆゑ奇異のおもひをなし熊を狩ずして空しく立ちかへりしと清水村の農夫ら語りぬ此山半より上ハ岩を骨として肉の土薄く地脉気を通じて破隙をなすゆゑ天地妙〻の奇工思量べからべ

○雪頽

山より雪の崩頽を里言ふなだれとのふ又なだれともいふ按ふなだれハ撫下るくるを『なだれ』いふハ結用ことばなり山ふもいふことふハ雪頽の字を借て用ふ字書ふ頽ハ暴風

三國嶺雪頽の上往來の圖


玉屑團成三國峯
寒光遶骨難移節
何人寵雪双花月
棧徑凌雲踏白龍
京山人題
京水畫

ともあるべしとく叶つるゆゑさて雪頽ハ雪吹ホ双て雪国の難義とス高山の雪ハ里よりも深く凍るも又里よりハ甚し我国東南の山〻里ホちかも雪一丈四五尺なる浅しとス此雪こゝりて岩のごとくなるもの二月のころホいたるべ陽気地中よりいきく解んとスる時地気と天気との為ホ破て響をなス一片破て片〻破る其ひゞき大木を折ごとし雪頽ハ山の地勢と日の照とホよりてみだゝ処となるべきさる処ありなるべくスハ二月ホあり里人その時を知り処を知り蔺を知る由ホなるべきの事ホ撃死するもの稀之ありとも天の気候不意ゆゑて一定なるべきなるべ雪頽の下ホ身を粉ホ砕もあり雪頽の形勢ハいかんとなるべなるべきなんとする雪の凍その大なるハ十間以上ホなるも九尺五尺ホあまる大小数百千巻〻方をなるべく削りそなるごとくなるべく方をなるべなるの下ホ転ず上より一度ホ崩頽るその響百千の雷をなし大木を折大石を倒す此時ハかなるべく暴風力をそなへ粉ホ砕る沙礫のごとく雪を飛せ白日も暗夜の如く

その慄しきを筆舌ホ尽しがたし此雪頽ホ命を捨る人命を拾ひ人我ガ見聞しるを次の巻ホ記して暖国の人の話柄とス

或人問曰雪の形六出なるハ前ホ弁ありて詳なる雪頽ハ雪の塊なるゆゑん砕るて雪となるゆゑ天の円と地の方なるとを併合て六出をなスハ六出ハ円形の裏ハ雪天陽を離て降下り地ホ飯バ天陽の円さ象らせて地陰の方なる本形ホ象るゆゑホ雪頽ハ千も万も圭角ハこのなるべく解るそのゆゑ角く円くなるて陽火の日ホてらさるゆゑ天の円ホよると陰中ホ陽を包ム陽中ホ陰を抱ハ天地定理中の定格ハ老子経第四十二章ホ曰萬物負陰而抱陽冲気以為和とハ此理を以てする時ハ内美さなしとも内美さなるべくハ陰中ホ陽を抱ばして天理ホ叶ぶをりくハ夫ホ代りて理屈をいハざるべく家内治ざるべく理屈ホ過牝鳥且をつくるべくなるべ

又家内の陰陽前後して天理に違ふ事家の亡るもと萬物の天理誣べからざるかくのごとしとのたまへども問客唯ことゝして太りぬ雪頼悉く方形のまゝあるべきとゝ十ゐして七八八方形をうしなへば故に此説を下せり雪頼の図多く方形に似たるものハ其七八をとりて模様を為るのみ

北越雪譜初編巻之上終

国立公文書館
National Archives of Japan